

6. 夜久野の歴史概観

旧夜久野町の歴史については、『夜久野町史』第四巻通史編（夜久野町編纂室2013）に詳しいが、ここでは、古代以降の歴史について簡単に略述しておこう。古代において丹波国天田郡夜久郷に属したことは、承平年間（931—938年）に編まれた『和名類聚抄』によって明らかにである。ただし、古代や中世における夜久郷の動向を示す史料は乏しい。鎌倉時代末期の記録になるが、夜久郷を内蔵寮領にするという記事が残されており、それまで平安時代の夜久郷は荘園としては立券されず、国衙領として存続したと推測されている（大村2013）。鎌倉時代の夜久郷の動向は、『吾妻鏡』に記載があり、「神人先達」と称する者による厳しい取り立てを禁じるように訴えている。これより遡る史料では、滋賀県高島市朽木の長寿寺に伝わる大般若経第556巻の奥書に夜久郷小波多村で筆写されたことが示されるのが、夜久郷の記載をもつ稀少例である。この大般若経の年代は、他の巻の奥書からおおよそ平安時代末期のものと推測されている。小波多は旧夜久野町畑にあたと比定でき、現存する円満院に関係すると考えられている。畑地区には、円満院のほか、桑村薬師堂、柿本観音堂があり、いずれも平安時代後期に遡る古仏を安置しており、大般若経書写の場所としてふさわしい。このほかにも夜久野地域には平安時代後期に遡る古仏が多く存在しており（I部4章参照）、また大油子の大日寺、清海寺、小倉の安養寺、額田の長福寺など、廃寺となった寺院の伝承も多く残されており、山寺を中心に寺院が数多く営まれていたと考えられる。

このことと関わって、夜久野地域では経塚が多数発見されていることが注目される。今西中の今西経塚、井田の谷城経塚、額田の月輪経塚、板生の矢谷経塚、直見の副谷経塚、千原の東シ経塚がある。このうち、今西経塚と月輪経塚は銅製経筒を伴い、平安時代後期から鎌倉時代初めに比定できる（木下2022）。月輪経塚と矢谷経塚からは銅鏡も出土した。後者の銅鏡は陰陽道の呪文を記した木製円板に挟まれて出土しており、応永□寅二月廿二日の紀年が記されることから、応永5年（1398）もしくは応永17年（1410）に比定できる。

室町時代には足利尊氏の母、上杉清子による康永元年（1342）の夜久郷今西村を光福寺（安国寺）への寄進したことを端緒として、しばしばこの土地をめぐる争いが安国寺文書に記されている。このように中世後期になると、次第に夜久郷の動向を示す史料が増えてくる。他方、中世の夜久郷は夜久氏文書などにより、夜久氏の活躍が想定されている。鎌倉時代に地頭職を得て以降、この地で力を持ったと伝えられるが、実際には室町時代になって、丹波守護細川氏のもと、荻野氏や内藤氏とともに活動していたことが、史料から明らかになっている。夜久一族、夜久衆などと記されており、国境地帯を押さえる有力武装集団として一目置かれていたようである。この夜久氏の拠点と目されたのが、高内の長者森古墳が位置する旧育英小学校の場所であり、もともと長者森古墳は館塚と呼ばれ、夜久氏の館の跡と伝えられていた（II部3章参照）。この背後の山中には、高内城と呼ばれる山城が築かれており、これも夜久氏に関わる城と考えられている。

そもそも、夜久野には多くの城が設けられている。『夜久野町史』第四巻で福島氏が取り上げた数は21カ所にのぼり（福島2013）、また『京都府中世城館跡調査報告書』第2冊では、25カ所の山城を紹介している（京都府教育庁指導部文化財保護課2013）。牧川の河谷を見下ろす位置に築かれた城が多く、丹波と但馬を結ぶ、あるいは丹後へと抜ける交通路を意識した配置であり、かつ国境近辺の緊張感を伝えているようである。これらの山城の中では、日置城が最も大規模で、多数の曲輪が尾根上に段を形成して配置されている。

江戸時代に入ると夜久郷は福知山藩に属し、寛文9年（1669）以降は明治の廃藩まで朽木家が藩主であった。郷内の村もほぼ現在と変わらないことが近世の検地帳や郷帳から読み取れる。産業では、漆の産地として知られ、漆掻きが産業の面でも重要な位置を占めていた。このほか、中世以来の鉱山開発も活発であったことが知られる。夜久野地域には北部を中心に多くの鉱山遺跡が残されており、調査がおこなわれた畑のヤナ谷遺跡では、中世末ないし近世初期の製鉄炉が発見されている。鉄や銅が重要な資源となっていた。また、高内石の石材加工、夜久郷の瓦も特産品であり、養蚕も加わって、さまざまな手工業がおこなわれていたことが明らかになっている。

明治の廃藩置県がおこなわれると、明治4年（1871）に福知山県から豊岡県、そして、明治9年（1876）には京都府に属することとなった。明治22年（1889）の町村制施行により、西部の直見、板生、平野が上夜久野村、中部の小倉、大油子、高内、日置、末の各村が中夜久野村、畑、今西中、井田、額田、千原の各村が下夜久野村となった。その後、昭和31年（1956）に中夜久野村と下夜久野村が合併して夜久野町となり、その際に小倉と大油子が上夜久野村に編入された。昭和34年（1959）には夜久野町と上夜久野村が合併し、平成18年（2006）の福知山市との合併までは、夜久郷が夜久野町としてまとまって存在していたことになる。（菱田）

参考文献

- 大村拓生2013「中世前期の夜久野」『夜久野町史』第四巻（通史編）福知山市
- 木下博文2022「近畿型経筒の創出・展開―東北地方を中心に―」『岩手大学平泉文化研究センター年報』10巻
- 京都府教育庁指導部文化財保護課2013『京都府中世城館跡調査報告書』第2冊―丹波編―京都府教育委員会
- 福島克彦2013「室町時代の夜久野」『夜久野町史』第四巻（通史編）福知山市
- 夜久野町史編さん室2013『夜久野町史』第四巻（通史編）福知山市

編集後記

本書の執筆・編集には、筆者含めた学生も少なからず携わった。思えば初めて末窯跡群の踏査に参加した時は、山の中で右も左もわからず先輩の背中にひっついていき、落ちている土器に夢中になっていた。後輩を先導する立場になると手元の地図と睨めっこしつつ、採取した土器の記録や、整理作業の日程を考えた。夜久野では先輩方の歩みも蓄積しており、私自身も他分野の先生方との合同踏査や資料の分析、成果報告会の開催などの得難い経験をした。その成果をこうして1冊にまとめ上げる段階に関わることができたことは感慨深い。多くの人と関わり、貴重な資料に触れる機会を得たことに感謝したい。(も)

表紙・裏表紙写真

上左：夜久野末窯跡群の調査風景

上中：長者森古墳

上右：ボーリング調査風景

下：夜久野末窯跡群の遠景（ナゲ地区）

(以上、菱田撮影)

裏表紙：小倉田古墳出土双龍環頭大刀

(栗山雅夫氏撮影)



京都府立大学文化遺産叢書 第28集

夜久野の後期古墳と末窯跡群

編集 菱田 哲郎 (京都府立大学文学部教授)
諫早 直人 (京都府立大学文学部准教授)

発行 京都府立大学文学部歴史学科
〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町 1-5

発行日 2024年3月29日

印刷 北斗プリント社

〒606-8540 京都市左京区下鴨高木町 38-2